

諏訪山公園の蝶

山口 福男

諏訪山公園は神戸市のほぼ中央に所在する都市公園で面積は5.2ヘクタールあるが平坦部はごくわずかで大部分は六甲山に続く断層崖の急斜面に設定されている。公園の植生はアカマツを主体とした二次林であるが、マツクイムシによるマツの衰退が激しく、砂防用に植栽されたニセアカシアや公園樹としてのサクラ(ソメイヨシノ)・イロハカエデなどが目立つ。造成されてから、かなりの年数を経過しているので樹齢が五十年を越す木が多い。このような植生からみると蝶の生息環境として好適とは考え難い。しかし公園南部の市街地に接する所に緑の相談所が設置されて、小規模な花壇であるが年中花の絶えることがない。蝶は相談所の花を重要な蜜源としており、公園に飛来する数も種類も意外に多い。筆者は諏訪山公園緑の相談所に1985年から相談員として勤務の傍ら蝶の観察を続け十年を経過した。そこで過去十年の結果をここに纏めて報告する。

<アゲハチョウ科>

アゲハチョウ 4月中旬から5月中旬にかけて春型が、6月中旬頃から夏型が現れはじめ、11月上旬、年によっては中旬頃まで飛来する。風の少ない晴れた日中にはいつでも数匹が訪花している。

発生源は市街地のミカン科の植物で、鉢植えの温州ミカンやサンショウにも例外なく幼虫が発見できる。

クロアゲハ アゲハチョウより2週間ほど遅れて5月上旬から下旬まで春型が出現し、7月中旬から夏型となって10月中旬頃まで飛来する。アゲハチョウに比べると個体数は遙かに少ない。

飛来数をカウントしてみたが、同一個体がかな

り長時間公園内に滞在するので目視だけでは正確に測定できない。発生量の年次変動は前種同様少ない。発生源は恐らく市街地のミカン科植物が主体と思われるが、山中のカラスサンショウなどの野生植物での発生も重要かも知れない。

モンキアゲハ クロアゲハの最盛期を迎える5月中旬頃第一回成虫が飛来するが、発生が前種より遅いのではなく、個体数が少ないために目撃のチャンスが少ないためであろう。7月中旬以降の梅雨明けの晴天日に第2回成虫が発生するのは前種と同じで、8月下旬から10月半ばまで第3回とみられる成虫が飛来する。これらの夏型の成虫はかなり少なく最盛期と思われる時期でも週に1~2匹にすぎない。本種は市街地になじみ難い蝶のようで、ミカン類よりもカラスサンショウを好むのを見てもうなずける。当公園に飛来するのはかなりの遠隔地で育った個体かも知れない。

ナガサキアゲハ 神戸市には1975年頃から発生し始め、近頃ではごく普通の黒いアゲハチョウとなっている。初発生はクロアゲハよりも若干遅れるような感じがするが、第2回成虫の発生は大差はない。夏型の飛来は10月半ばまで続く。個体数はクロアゲハ程度であるが日によってはこれより多いこともある。栽培ミカンを好むことから発生源は市街地にあると推定される。

カラスアゲハ もともと市街地に姿をみせることの少ない蝶で、年に数回飛来するだけである。

これまでに春型を目撃するチャンスに恵まれていない。食樹が主に野生のミカン科植物であることと平地よりも山地が好きな性質が市街地に馴染めない理由かもしれない。

ミヤマカラスアゲハ 神戸市内では10年ほど前まで迷蝶のあつかいであったが、近年では毎年のように目撃されたり採集されるようになっている。

当公園でも1993年9月に1匹の雄が飛来してラントナで吸蜜した。

キアゲハ 当公園への飛来の少ないアゲハで、夏から秋にかけて数回見かける程度。公園内のセリ科植物の観察を続けているが幼虫は未だに確認できていない。近郊ではアゲハチョウについてよく見る蝶なのに、当公園に住みつかない理由がよくわからない。

アオスジアゲハ 第1回成虫は早い年には4月下旬頃から、遅くとも5月上旬には飛来し始め、6月に入ると一時姿を消すが、7月から夏型の第二回成虫が発生し、その後10月下旬頃までとぎれなく飛来する。発生量は平年であればアゲハチョウと同じで、風の弱い晴天の日中にはいつでも花壇で吸蜜するのが見られる。しかし年次変動があるようで、1993年から94年にかけて飛来数が目立って少なく、飛来をみない日さえあった。発生源は公園内にもありクスノキに多くの幼虫が見られる。なお当公園では5月中旬頃に、前翅の中室に青斑の現れるエサキ型が毎年飛来する。

<シロチョウ科>

モンシロチョウ 3月から11月まで途切れなく飛来する。公園内の食草は必ずしも豊富とはいえないが個体数は多い。成虫の飛翔力からみてかなり遠隔地からも飛来しているのであろう。

スジグロシロチョウ 個体数は少なく、6月に発生する第二回成虫が飛来するだけで、この現象は毎年のものである。公園内に発生源がなく隣接の山地から飛来すると考えられる。公園に飛来した蝶は数日滞在することが多い。

モンキチョウ 近郊にごく普通の本種が意外なほど少なく、4月から10月の間に数回見るだけに

過ぎない。しかも、訪花吸蜜するとあわただしく飛び去る。公園内には食草となるマメ科植物が少ないうえに、市街地になじめない本質のせいかも知れない。

キチョウ 毎日というわけではないが、ほぼ周年にわたって姿を見せている。相談所に敷地内で越冬すると冬でも暖かい日に飛ぶのをみることができる。公園内のネムノキで育つのか、他から飛来するのかは不明。飛来個体は数日間滞在することが多い。

ツマグロキチョウ 10月に飛来することがあるが、これまで公園内での越冬は確認していない。

飛来した蝶はせいぜい1日位しか滞在しない。夏型の成虫も食草のカワラケツメイも見たことがないので、発生源はかなり遠いと推定される。

ツマキチョウ 過去10年間に3回観察できた。

花壇のハナナやハボタンの花で吸蜜が終わるとすぐに飛び去り滞在することはなかった。発生地は遠いと推定される。

<シジミチョウ科>

ムラサキシジミ 6月から12月までの間に連続して発生しているのであろうが、秋になるまで見ることは少ない。晩秋になると花壇に訪れるので観察の機会が多くなる。公園内のアラカシで育つのを確認している。発生量の年次変動はかなりあるが、飛来を見ない年はなかった。

ウラゴマダラシジミ 1985年6月にイボタノキに訪花しているのが観察できたのが唯一の記録である。六甲山系には発生する所が多いので、そこから飛来したのであろう。公園内には食樹があるので定着の可能性があると考え観察を続けているが、その後一度も飛来を見ていない。

アカシジミ 5月中旬に姿をみせた年(1992)もあるが、下旬から発生するのが普通のものである。公園内には食樹となるアベマキやコナラがあ

り、生息環境として条件がそろっていると思われるが意外に少ない。発生の多い年でも数匹見る程度で、少ない年には見る機会がないことがある。

トラフシジミ 公園内で発生しているのか、通過するだけなのかは不明。6月に1～2回飛来するのを見るだけで、年によっては出会えないこともある。

ベニシジミ 3月から11月まで連続して発生するが、近郊の平地に比べるとはるかに少ない。

原因として食草の乏しさが第一に考えられる。

ウラナミシジミ 8月中旬頃から目に付くようになり11月末まで花壇での常連となる。公園内には餌となるマメ科植物は少ないので、発生源は遠い所と思われる。

ヤマトシジミ 3月から11月まで晴れた日にはいつでも見られる。食草のカタバミのあるところには必ずと書いていいほど活動している。

ルリシジミ 3月中旬頃から発生し始め11月まで続くが個体数は少ない。第1回と第2回成虫はよく目につくが、その後は発生量が少ないこともあって観察が出来ていない。公園内で発生していると思われるが、これも確認していない。

<ウラギンシジミチョウ科>

ウラギンシジミ 秋に入ってから姿を見せることが多く、5～8月に飛来することは少ない。

公園内には餌となるフジが存在するが、ここで発生するより遠くから飛来する個体の方が主力のように考えられる。飛来数の年次変動は大きく、1987・88年の秋に多く飛来したが、1993・94年は数匹みただけだった。

<マダラチョウ科>

アサギマダラ 過去10年間に飛来を確認したのはわずかに3回だけで、1987年6月、91年10月、93年10月であった。公園内には餌となるガガイモ

科の植物は自生していないので、本種は訪花するし通過するだけである。飛来しても滞在時間は短い。

<タテハチョウ科>

メスグロヒョウモン 1994年6月に雄成虫が飛来した。六甲山系では時々見るがあるので、そのうち来ると予期していた。訪花し吸蜜した後、滞在することなく飛び去った。当公園には餌となるスミレは少なく、発生地とはなり難い。

ミドリヒョウモン 神戸市では十数年前頃から10月に入ると上中旬にわたり、鱗粉のはげ落ちた成虫が多数飛来するようになっていて、無風の晴天の日には当公園の花壇にモンシロチョウ並みに常時吸蜜するのを見ることが出来る。市内全域でこのような現象があるが、このおびただしい蝶が何処で発生し飛来するのか見当がつかない。

ツマグロヒョウモン 市内では1980年代から目立つようになった蝶で、当公園には6月から11月の間に飛来する。個体数は8月を過ぎる頃から増加し、10月が最高となる。飛来した蝶は滞在することが多く、秋には数日間に及ぶことがある。公園内の花壇でパンジーを食っている幼虫を見たことがあるが、発生源となる程の量ではない。発生量の年次変動はかなりある。

アサマイチモンジ 六甲山中で発生したのが飛来することがあるが、滞在することはなく訪花後すぐに飛び去る。過去10年間に観察したのは4回だけで、いずれも5月末から6月始めであった。

コミスジ 初夏から晩秋まで、ごく普通に見られた蝶であったが、1980年代になってから気がついたのだが、めっきり少なくなっている。当公園での飛来数は年に数匹にすぎない。

ミスジチョウ 1991年と92年の、いずれも6月に飛来を確認した。もっと多いかも知れないが、公園内に多発するホシミスジとまぎらわしく、飛

翔中のを判別するのは大変難しいので見逃している可能性が高い。飛来した蝶は数時間滞在し、イロハカエデの樹上を旋回するのを見たので産卵の可能性が考えられたが越冬幼虫は確認できなかった。

ホシミスジ 1980年代から市内で増加した種類で、当公園では5月末から11月末まで常時見られる。越冬幼虫はコデマリに多く、ついでシジミバナでユキヤナギには少ない。発生量の年次変動は少ない。

キタテハ 夏型の飛来は少なく、秋型の成虫が10月になってから目だち始める。12月まで花壇に訪れているが、その後は姿を見せることは少ない。

当公園内で食草のカナムグラを見かけないので、発生地は裏山であろう。

ヒメアカタテハ 前種と同じように秋になってから飛来することが多く、春から夏までの間に見かけることは少ない。飛来数の年次変動は大きくない。公園内には食草となる植物は十分に存在するが、未だに幼虫は確認できていない。

アカタテハ 早春の暖かい日に越冬成虫が飛び出してくることがあるが、毎年とはかぎらない。

春以降もたまに飛来するのを目撃する位で、個体数は少ないようである。カラムシやヤブマオに幼虫がつずった葉を見ることがあるので、当公園でも少数ながら発生している。

ルリタテハ 秋に飛来した個体が公園内で越冬することがあるが、発生が続いた年は一度もなかった。夏まで姿を見せることは殆どなく、公園内に植栽されたホトトギス類が幼虫に食害されたことは10年間一度もなかった。

コムラサキ 本種も個体数が少ない蝶である。

8月の末から9月にかけて1～2回飛来するだけである。飛来しても通路で吸水する程度で、滞在することなく飛び去る。公園には餌のヤナギ類

が少ないことが生息に適さない原因の一つであろう。

ゴマダラチョウ 幼虫の餌のエノキがあり、成虫の栄養源としての樹液もあるのに個体数が少ない。当公園内で継続して発生しているとは考え難い。毎年梅雨明けとなる7月中頃に姿を見せてしばらく滞在するが、いつも1匹だけで2匹以上の数を観察したことがない。

ヒオドシチョウ 桜の満開のころ、越冬成虫がモモヤソメイヨシノの花を訪れているが、幼虫の生育歩留まりはよくなく、過去10年の間一度も多発したことはない。6月には羽化したばかりの成虫が1～2匹飛来する。

オオムラサキ 1990年と93年の、いずれも8月上旬に翅のすり切れた雌が飛来している。公園内のエノキに産卵したかと期待したが次世代の発生は無かったようである。数キロメートル離れた発生地から飛来したと考えられる。

イシガケチョウ 分布圏を北に拡大中の蝶で、神戸でも発見報告の件数が増加している。当公園にも1989年12月に1匹の雌成虫が飛来した。園内をはじめ裏山には餌となるイヌビワが自生しており生息条件は整っていると思われるが定着の兆しは見られない。

<テングチョウ科>

テングチョウ 当公園で年中いつでも見ることのできる蝶であるが、年によって発生量が大きく変動する。1985年と91年は多発生で、6月から翌年の春まで、この蝶の姿を見ない日が無いくらいで羽化の最盛期には公園の花壇で数十匹が乱舞した。

<ジャノメチョウ科>

ヒメウラナミジャノメ どこにでもいる普通の蝶なのに、当公園には少ない。毎年5月に出現して数日間滞在するが次からの世代が続かない。

食草や生息環境から見て、もっと多く発生しても不思議はないのだが。

クロヒカゲ 本種も当公園で見ることには少ない。
6～9月の間に飛来することがあり、数日滞在する。

ヒカゲチョウ 前種と同じ位に少ない。5～6月の間に出現し、数日間滞在する。年に1匹か2匹見るだけであるが、何時も新鮮な個体である。

ヒメジャノメ 都市近郊に、ごく普通の蝶であるが当公園には飛来することは少ない。6月から11月の間に姿を現すことがあり、数日間滞在する。

サトキマダラヒカゲ 本種の飛来数も少ない。
例年6月に新鮮な個体が飛来するが滞在時間は長くない。公園を通過するだけのこともある。公園内にはネザサのほか植栽されたクマザサなどがあるので定着の可能性はあると考えられる。

<セセリチョウ科>

コチャバネセセリ 5月中旬頃に羽化したばかりの新鮮な個体が花壇に現れ、気温の高い日中には路上で吸水するのが見られる。生息密度はこの頃が一番高く、その後の飛来数は少ない。公園に飛来した成虫はそのまま住み着いているようで滞在期間が長い。公園内のタケ・ササ類で発生していると推定される。

キマダラセセリ 夏から秋にかけて公園の花壇に時々飛来するのを見る。幼虫の食性からみて当公園内でも生息の可能性は高いが確認していない。

オオチャバネセセリ 当公園花壇の常連で、6月から11月までの間観察できる。飛来数は目だつほどには多くなく、約10平方メートルの花壇で一度に視野に入るのは、多い時でも2～3匹程度である。年による発生量の変動は少ない。公園内のタケ・ササ類で幼虫が育っているであろう。

チャバネセセリ 夏の終わりの8月下旬頃から飛来し始めるが、その数は年次変動が大きい。

発生が多い年には11月になってもかなりの個体数が見られる。本種の生態、とくに越冬については不明のことが多く、神戸市内での越冬は確認されていない。5～7月に姿を見せることなく、8月下旬にいきなり飛来があるのは、遠隔地からの移動としか考えられない。

イチモンジセセリ 6～7月の間に少数の飛来があった後、8月中旬頃から増え始め10月末まで公園内で一番数の多い蝶となる。発生源は近郊の水田で、発生量の年次変動が大きく、これまでに多かったのは1994・93・88年であった。多発年には当公園でも数株しかない見本栽培のイネに幼虫が発生した。

諏訪山公園では過去10年間に上述のように51種が観察できた。神戸市内から97種が報告されているので観察を続ければ、もう少し増えるはずである。飛来の可能性のある種をあげれば、次のようである。

- ジャコウアゲハ コツバメ ツバメシジミ
- ウラナミアカシジミ イチモンジチョウ
- コジャノメ ミヤマセセリ

(YAMAGUCHI FUKUO 神戸市須磨区神ノ谷3丁目6-4)

